

令和2年度 若草幼稚園自己評価

若草幼稚園の令和2年度における自己評価は以下のとおりである。

1 保育の計画性

各行事への長期に渡る取り組みについては、安定してきている。各学年の取り組みを全体で共有できる資料や職員会の持ち方が、有効に働いていると考えられる。各保育者にとって、週日案が自身の保育に位置づけることが目標だが、これについては課題が残る。書いたら書きっぱなしであることが多く、保育を振り返って明日の保育を構想するという点が課題として大きい。日々の保育を意識化し、明日の保育をイメージできる専門性が求められる。

2 保育の在り方、幼児への対応

園文化に支えられ、子ども自身が具体的な遊びのイメージを持っていることで、新人保育者も、この環境を生かした保育を営むことができている。特に、子どもの試行錯誤力や新しい技への挑戦は、年々豊かになっている。また、鬼遊びが定着し、自分たちで展開する力も年を経るごとに確実なものになってきている。どの保育者も、楽しそうにこの遊びに向かう姿が、子どもたちのよいモデルとなっており、遊びの伝承を支えているものと考えられる。

子どもに寄り添うことは丁寧に行うが、子どもを「導く」という点では、課題が大きい。子どもの心を受け止めることと、人として守るべきルールや規範について、教え導くことのバランスに欠ける。これは、一人ひとりの子どもに対するねらいの定め方が甘く、それを念頭に置いた長期的な見通しや実践力の弱さが原因である。そのため、優先順位のつけ方もあいまいな点が目立つ。自分の価値観を問い、保育観を共有しながら、RPDCAを積み重ねていくことが求められる。

3 保育者としての資質や能力・良識・適性

どの保育者も、誠実に子どもに向かい、その気持ちを受け止めていこうとする姿勢が見られる。この点は、本園の保育者として大事な資質である。また、年数を重ねるごとに、保育者としてハリのある身のこなしが身についてきている。一斉活動などで、子どもの前に出たときに、臨機応変な対応と共に、リーダーシップをきちんと発揮できることが今後の課題である。

社会人として、保育者としての知性、教養については、これから先も、努力が必要である。保育者としての教養、身のこなし、表現力、理解力、計画力、語る力を磨き、より洗練された専門家に育ってほしい。

4 地域の自然や社会とのかかわり

本園所有のすくすくの森で、植物や虫などにかかわり、豊かな自然体験活動を重ねている。特に作品展で「風」をテーマにした年中組では、風車、紙飛行機、軽い布など、さまざまな教材とのかかわりを通して、風を身近に感じていくことができた。また、すくすくの森における避難訓練も着実に歩みを進

めていくことができ、具体的な避難の仕方について、職員間で研修を重ね、共有していくことができた。

2020年度は、コロナ対策のため、保幼少連携事業を具体的に行うことができなかった。地域連携協議会の役員や、地域の防災、人権イベントについても、2020年度は活動が難しかった。

5 研修と研究

組織運営について、特に新人教育をテーマに、大妻女子大学の岡先生に引き続きご指導いただいている。そこで、「気づく」こととそれを「定着させる」ことが、大事なポイントであることが分かった。実際に、「分からないこと」が「分からない」つまり、分かってほしいことを分からせることができないことが、大きな課題であり、ここには、個別対応がいる。新人教育委員会を立ち上げ、個別に問題を明らかにして、対応を決めていく必要があることが分かった。

また、今年も生活発表会の取り組みについて、共立女子大学の田代先生にご指導いただいた。事前に生活発表会の練習を動画で送り、それについてズームでコメントを頂いた。具体的な解決策や気づけなかったことを指摘して頂き、具体的に劇を改善していくことができ、大きな成功につながった。全国トップレベルの講師を迎えて、ご指導いただけることは、本園の強みである。

コロナ禍で、研修会自体が開かれない状況ではあったが、それぞれがキャリアに応じて県主催の研修を受けることができている。一人一人の保育者が、説得力を持って、自分の保育を語るようになることが、引き続き課題である。

避難訓練についても、NPO 法人減災教育の江夏さんのご指導を適宜受けながら、進めていくことができた。森の避難訓練を具体的に考えていけたことは、大きな成果である。